

平成 20 年度第 1 回四国ブロッククラブミーティング 2008 開催報告

日時:2008 年6月1日(日) 13 時 15 分~17 時

会場:高知県「四万十市中央公民館」

はじめに…

去る6月1日に高知県の四万十市中央公民館にて四国ブロックの第1回クラブミーティングが開催された。四国地区の13の指定クラブ(継続5クラブ・新規8クラブ)から20名の担当者と、その育成を支援する4県全てのクラブ育成アドバイザー、そして日本体育協会クラブ育成課員と県体育協会事務担当者、地方企画班員が今回の協議会に参加した。今回のクラブミーティングの目的は、「クラブの夢・ビジョンとそれを実現させる方策を考える」という点にあった。それは、全国のいくつかの指定クラブにおいては、なぜクラブを創設・育成するのかということよりも、得た助成金をこなすために事業に振り回されるケースが見られたり、クラブを何のために設立するのかということよりも、クラブを設立することが目的やゴールになってしまったりしている指定クラブが見られるからである。クラブは、誰かにお願いされて組織化するものではなく、同じ目的や意思を持った人々が互いにお金や知恵を出し合い、クラブのメンバーが楽しく創意工夫しながら抱いた目的や夢を叶える場であり、ある意味、クラブの設立は、いわば集まったメンバーの想いや夢を叶えるための手段にしか過ぎない。そこで指定クラブに、「クラブを創設・育成する意味」について確固たる信念を抱いてもらいたいという地方企画班員の願いから上記のようなテーマを設定した。



継続クラブによるプレゼンテーション「我がクラブの夢とビジョン」

5つの継続クラブには、1年間の活動を振り返ってもらい、ユニークな活動やこれぞ！と思うようなよかった活動内容などを交えて、10分間のプレゼンテーションで1年後に控えたクラブ設立に向けての夢を語ってもらった。

徳島県の勝浦町総合型地域スポーツクラブ設立準備委員会は、スポーツによるまちの活性化や町のスポーツ振興の中核的存在となるべく、地区体育協会を中心に、競技スポーツだけでなく、町民が気軽に運動やスポーツに親しむことができるような取り組みを展開しているということであった。ただ、行政に対する依存度が高く、設立後の自立やクラブ育成の担い手の発掘などが課題としてあげられていた。

徳島県の鳴門市総合型地域スポーツクラブ設立準備委員会では、体育指導委員や地域のスポーツ関係者を中心に、これまで身体を動かす習慣のなかった市民に運動習慣を身につけてもらうため、太極拳、ミニサッカー、ファミリーバドミントン、ヨガ、卓球など、様々な教室及びサークル活動を現在展開している。このクラブの特徴は、「自分たちで創るクラブ」という意識を養うために、パーソナルネットワークを活かし、サポートスタッフが会員の募集、プログラム運営、また事務処理などを担っていた。

徳島県の上板スポーツクラブ(仮称)は、体育指導委員会が中心になって町民の健康増進や医

療費の削減、さらには町民自らが自分たちのスポーツ環境を築き、スポーツを通じた地域づくりや地域活性化をめざせるようなクラブづくりを行おうとしていた。そのため、町民に対し、「運動・スポーツ実態調査」を実施し、町民の運動欲求やニーズの把握に努めていた。ただ、このクラブも行政に対する依存度が高く、クラブの自立が今後の課題ということであった。



愛媛県の大洲スポーツクラブは、子どもから大人まで、また競技を極めたいと思う人から楽しくスポーツを行いたいという人まで、地域住民のニーズやプログラム参加者の声を反映したクラブをめざしており、地元企業とタイアップし、イベント時の弁当のスポンサーになってもらったり、既存団体とのコラボレーションなども図ったりしているということであった。

高知県のユニバーサル四万十は、生涯スポーツと障害スポーツの一体化と融合をめざし、障害を持つ人にとってスポーツが特別な活動ではなく、住み慣れた地域で気軽にスポーツができるような環境を創りたいという想いで、現在、活動に取り組んでいるということであった。昨年度、ヨガ体験教室とストレッチ体験教室を実施する際に、新聞の折り込みチラシなどでプログラムのプロモーションを図ったところ、市民から予想以上の反響があり、市民の健康・スポーツに対するニーズが高いことはわかったものの、現状では、障害を持つ人と健常者との活動の一体化や融合化は十分図れていないということであった。

グループディスカッション

グループディスカッションは、第1回目ということもあり、クラブ間の温度差を考慮して、継続クラブと新規クラブに分かれて実施した。継続・新規クラブともに、事前に課題を設定し、継続クラブには、プレゼンテーションで語った夢を具体的に実現させる方策について、新規クラブには、「クラブの夢・ビジョン」と自地域の状況や住民のニーズを把握するために必要な基礎情報（人口規模と高齢化率、国民医療費、小・中・高校生の児童・生徒数、中学・高等学校の運動部の加入率など…）の収集という課題を課した。継続クラブは、夢を実現させるための具体的方策について各クラブが説明した後、地方企画班員と助言者として参加してもらった元中・四国ブロック地方企画班員で広島市立大学の曾根先生から質問・コメントが述べられた。新規クラブは、前田地方企画班員による「クラブ設立に向けた基本的なステップ」のミニレクチャーを行い、その後、策定した事業計画の見直すためのグループワークを実施し、地方企画班員、クラブ育成アドバイザー、そしてオブザーバーとして参加した愛媛短期大学の井澤先生からコメントや助言が述べられた。

継続クラブのグループディスカッション

徳島県の勝浦町総合型地域スポーツクラブ設立準備委員会と上板スポーツクラブの両クラブは、ともに行政からの自立とクラブの担い手の発掘という課題を抱えていた。勝浦町は、無人島でのシュノーケリング体験や大学生と小学生の交流事業、また健康と薬草講座などを実施し、幅広く町民を巻き込む工夫をしており、4月から会費の徴収を実施しているということであった。上板町は、地域体育協会の活動とオーバーラップしないような活動に特化し、町民の85%を占める運動・スポーツ非実

施者の獲得に努めていたが、現在、プログラム参加費を無料にしているため、クラブ立ち上げ後のことをにらみ、早急に参加費徴収に手掛けるべきだという助言が述べられた。鳴門市は、市全域をカバーする取り組みが厳しくなるため、市外で活動する人を引きつけるプログラムの展開、また現在、クラブ運営をリードアップする担当者に依存しない組織のシステムまた人材発掘に努めるべきだというコメントが述べられた。大洲市についてもクラブ運営に必要な財源確保が課題であると述べられ、会費の設定や参加費の徴収などについて助言が述べられた。四万十市は、生涯スポーツと障害スポーツの融合に行き詰まり始めたため、現在、ビジョンの再検討をしているということであったが、活動に固定観念を持たず、各地域で障害を持つ人に対する活動への理解を図るとともに、ニーズのある組織との関係構築に努めるようにすべきだというコメントが寄せられた。助言者として参加した曾根先生から継続クラブに対して、「目標設定止まりに終わらない」「ちょっと変わったような意見であっても発言や意見を大歓迎する」「特定の人にしかわからないという状況を組織でつくらない」といったことを組織で心がけてほしいという提案が最後になされた。



新規クラブのグループディスカッション

新規クラブの夢とビジョン、また活動計画については、以下の通りであった。香川県のDISPORTキラキラうたづでは、活動が維持できない学校運動部の補完的存在や身体を動かしたいけれどもなかなか運動やスポーツに取り組めないという児童・生徒のために、キンボールを核としたクラブをめざしたいということであった。徳島県的那賀町総合型地域スポーツクラブ設立準備委員会では、旧5町村に区画割りを行い、カヌーやキャンプ場を活かしたクラブをめざしたいということであった。東みよし町総合型地域スポーツクラブ設立準備委員会では、体育協会と体育指導委員が協力しながら、「誰でも・いつでも・世代を超えて…」という理念を掲げ、地域の隠れた人材を発掘しながら、スポーツをしない子どもたちやメタボ対策なども取り入れたいということであった。こまつしま総合型地域スポーツクラブ設立準備委員会では、体育指導委員を中心にバレーボールや健康教室など、現在の地域ニーズに応じて、さらに発展させたクラブづくりをめざすということであった。高知県の室戸スポーツクラブでは、健康づくりを中心とし、体育会に所属をしていない市民を中心に、スポーツ活動の入り口的な役割



を担いたいということであった。そして参加者の中で競技志向が高まれば、体育会と連携し、その人たちの受け皿になってもらうということであった。津野町B&Gスポーツクラブでは、少年団、体育協会、婦人会などの町体育関係者を中心にクラブづくりを進めたいが、設立準備委員会が運動・スポーツ実施者ばかりなので、実施していない人たちの目線を持ち、様々な活動を展開したいということであった。安芸クラブでは、これまで行政主導の消極的な活動であったので、総合型への取り組

みを起点に、住民主導の企画運営、さらには自分たちの健康は自分たちで獲得するという意識を市民に持たせるようなクラブづくりをめざしたいということであった。大月げんきスポーツクラブでは、2年後に体育会を解散し、総合型クラブに一本化するという方向を打ち出し、試行錯誤の段階であるということであった。過疎化が進むこの町において、総合型のプログラムを中心に、文化交流や健康づくりに取り組みたいということであった。

おわりに…

クラブづくりのはじめの一步として、「まずは…ともに考える“場”をつくる」ということ。人と情報を交流させ、地域住民の共同と相互作用を図る必要がある。次に、「クラブの理念・方針・ビジョンといった想いに対して信念を持つ」ということ。義務感ではなく、“楽しい！”と思うことを企画し、クラブの持つ魅力と可能性を語れるようになってもらいたい。そもそも共感・賛同できないものは、人には勧められない。「“絵に描いた餅”に終わらないためのアクションプランを作成する」ということ。何を、いつまでに行うのかという、具体的な目標、計画、そして行動計画を提示する。そして、「あまり難しく考えすぎない！ほどよい使命感と楽しい！の実現を…」ということ。眉間にしわの寄るような会議は御法度！“できない”“無理”“そんなことをしても無駄”といった揚げ足を取ったり、足を引っ張ったりすることなく、前向きにアイデアや様々な人々の知恵を連鎖させることが重要である。各指定クラブの積極的な取り組みと奮起を促すとともに、11月に成長した姿を楽しみにしたい。

(文責:地方企画班長 長積 仁 報告書作成・協力:高知県教育委員会スポーツ健康教育課)